

平成29年度運営諮問会議

1. 日時 平成30年1月15日（月）13時30分～15時28分

2. 会場 宇部工業高等専門学校 大会議室（管理棟3階）

3. 出席者

○運営諮問会議委員（五十音順・敬称略）

| | |
|-----------|----------|
| 安部 研一 委員 | 木村 悦博 委員 |
| 久保田 后子 委員 | 進士 正人 委員 |
| 津田 賛平 委員 | 徳永 敦之 委員 |
| 三隅 淳一 委員 | 師井 浩二 委員 |

○宇部工業高等専門学校教職員

| | |
|------------------|-------------------|
| 三谷 知世 校長 | 日高 良和 副校長（総務担当） |
| 廣原 志保 副校長（研究担当） | 久保田 良輔 校長補佐（教務主事） |
| 石尾 潤 校長補佐（学生主事） | 後藤 実 校長補佐（寮務主事） |
| 仙波 伸也 校長補佐（専攻科長） | 江原 史朗 情報処理センター長 |
| 春山 和男 技術室長 | 碓賀 厚 電気工学科長 |
| 三宅 常時 制御情報工学科長 | 小倉 薫 物質工学科長 |
| 松野 成悟 経営情報学科長 | 三浦 敬 一般科（理系）科長 |
| 武藤 義彦 AP事業推進責任者 | 二木 映子 学生相談室長 |
| 碓 智徳 キャリア支援室長 | 大西 由喜男 校長補佐（事務部長） |
| 西村 文隆 総務課長 | 伊東 明美 学生課長 |

（陪席）総務課副課長、学生課副課長、企画連携事務室副室長、総務係係員

4. 日程

13時30分 開 会
校長挨拶
出席者紹介
資料の確認
議 事
一、議長選出
二、議長挨拶
三、議題

13時46分 ・宇部高専における地域連携教育への取り組みについて
（質疑）

15時25分 校長謝辞
15時28分 閉 会

5. 配付資料

- 平成29年度運営諮問会議 開催要領
- 議題資料：「宇部高専における地域連携教育への取り組みについて」
- 運営諮問会議委員名簿
- 平成29年度運営諮問会議 座席表
- 宇部工業高等専門学校運営諮問会議規則
- 平成29年度宇部工業高等専門学校 学校要覧
- 宇部工業高等専門学校 第3期中期計画
- 平成29年度 宇部高専年度計画
- 平成29年1月～平成29年12月 宇部工業高等専門学校の動き
- その他
 - ・第41回 読書感想文コンクール 入選作品集（平成29年2月）
 - ・学校だより（94号 2017年11月）

(1) 開 会

総務課長の進行により、運営諮問会議が開会された。

(2) 校長挨拶

本日は、ご多忙の中、本校運営諮問会議に御出席いただき誠にありがとうございます。

昨今、どの分野におきましても、いろいろな変革が起きておりまして、教育界もまたしかりでございます。

本校も本年4月からカリキュラムを大幅に改めまして、アクティブラーニング、グループワークといった、今までの教室で教員が学生に知識を伝えるという形から大きく転換します。これにつきましては、地域の皆様方、地域のさまざまな機関の皆様方の御協力なくしては成り立ちません。本日の運営諮問会議では、その辺のところをぜひ御議論いただきたいと思っております。

ここで、うれしいニュースを2つほどお知らせします。昨年6月に本校卒業生がパナソニックの副社長に昇任いたしました。また、昨日、宇部市のアプリコンテストでは、本校と山口大学の学生さんの共同チームが優勝いたしました。これも大変うれしいニュースでございます。宇部市が最先端のこういったさまざまなビジネスモデルを構築でき、そして、また、市が活性化することを私ども切に願っています。

最後に、本校の特徴や、本日、御議論いただきます「地域での教育」を紹介していますビデオを御覧いただき、私の挨拶にかえさせていただきます。

(3) 出席者紹介、資料の確認

総務課長から、本日出席の運営諮問会議委員と本校教職員が紹介された。

引き続き、配付資料の確認が行われた。

(4) 議長の選出

総務課長の進行により、本会議の議長として進士委員が選出された。

(5) 議長挨拶

運営諮問会議の開催要領に基づきまして、議事を進めるといたします。私の今回のミッションは、宇部高専の教育・研究活動や運営に関する重要事項を審議し、校長先生に対して助言を行うことになっております。ぜひ、各委員におかれましては、いろんな立場から、いろんな方面から、ぜひ、

自由に御意見等いただき、宇部高専でこれから新しい取り組みをされる中で、特に、アクティブラーニングというのは非常にこれから重要なキーワードになっています。これに対して、いろんな面からのアドバイスをいただければと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。



(6) 議 事

(議長)

まず、宇部高専側から議題の説明をいただいた上で、意見交換を進めたいと思います。

それでは、早速議題に入りたいと思います。「宇部高専における地域連携教育への取り組みについて」、久保田先生、武藤先生から説明をよろしく願いいたします。

(教務主事)

それでは、前半、教務主事の久保田から御紹介差し上げて、後半、地域教育の中身に関しては、AP事業推進責任者の武藤教授から御説明差し上げます。

まず、最初に、宇部高専の教育システムが、これからどう変わろうとしていくのかについて、御説明差し上げます。

今、文部科学省とか、いろいろメディア等で言われておりますけれども、能動的学習。授業を一方的に聞くという勉強から、学生や生徒自身が考えるというふうに変わる転機を迎えております。特に、高校、大学、高大接続の部分というところも、いろいろメディア等で話題に上がっているかと思っておりますけれども、最終的には社会人として、知識や技術をどういうふうに活かしていくのかというところにつながります。

特に宇部高専の教育の中で、これから注力していくポイントですが、これまで、特に専門知識というところに焦点を当ててきたわけですが、それに加えて、今後はコミュニケーション力。それから、自ら学ぶ力。この3つに注力することで、社会で活躍しつつ、そこで主体性を持って卒業時に活躍して欲しいというところでございます。

宇部高専の目指すゴールは、まず一つ目に主体的な学びを促しつつ、最終的には地域も含んだグローバル社会で活躍できる学生をつくること。それから、高専の設置目的とも関係しますけれども、地域に対して、どういうふうに貢献していくのかというところも、高専のミッションの一つでございまして、そこも踏まえまして、二つ目には、地域のニーズや動向を踏まえて、地域と宇部高専が、連携しながら、地域に役立つ宇部高専にしたいというところでございまして。

このゴールに対して、どういう取り組みを現在進めているかと申しますと、1つ目がアクティブラーニングの推進でございまして。それから2つ目は、プロジェクト、プロブレム、両方のPBLを積極的に導入しつつ、4学期制を導入。これは今年度から導入いたしましたけれども、それと地域教育の内容を拡充していき、最終的には長期の学外学修の機会をもう少し充実させて、学生にはどんどん海外に出て行って体験していただきたい。地域企業を含め長期のインターンシップで、企業の活動の内容をよく把握し、地域の企業をもっと深く知ってほしいことが目標でございまして。

今、来年度から入学する学生の教育課程表の大幅な変更を検討しております。教育カリキュラムの特徴としましては、昨年度の運営諮問会議でも御報告差し上げたとおり、大学が導入している学修単位を設置基準では、高専でも60単位まで導入できるようになっておりますので、この60単位上限ぎりぎりまで、学修単位を導入することで、学生自身が考えるきっかけをもう少し増やすというところでございます。

それから、地域教育等もそうですけれども、社会で求められる能力というところは、特に専門学科で勉強する専門知識とは関係なく、社会人として求められる知識というところがございまして、本校では、これをジェネリックスキルというふうに呼んでいますけれども、このジェネリックスキルを一般科目として、1年生から5年生まで、学科横断型の同じ内容で全ての学科の学生に教育するというところでございます。

それから、専門における知識の活用力と実践力の涵養型の科目として、現在も導入しておりますけれども、校外実習（インターンシップと呼ばれるもの）、海外研修、それから地域教育、この3つが本校のこれからの教育の目玉となる部分でございまして。

あとは、1年生から専門の内容をより馴染んでもらいたいというところで、5年生とセットでの、ミ

ニ卒業研究のようなものを通して、1年時から専門学科への帰属意識等を強めたいというふうに考えております。

宇部高専APプログラムの3つの柱というのが、1つ目が国際交流、それから、2つ目が長期のインターンシップ、3つ目が地域課題解決型の地域教育でございます。

これら3つの目標としましても、先ほど申し上げましたように、宇部高専がこれからつくりたい、自ら考える学生、すなわち、特にグローバル化に対応していて、自分の未来志向性を持って、キャリアデザインができて、実際に問題を自分で考えて解決できる学生をつくりたいというところでございます。

ここから、先ほどの3つの柱の中身について簡単に御紹介させていただきます。

まず、国際交流事業に関してですけれども、これは高専機構から、もう一つ、別の事業である高専4.0イニシアチブとして採択されており、グローバル高専生を目的とした次世代型の国際交流の方法を確立するというものでございまして、今年度と来年度に実施する予定にしております。

目的としましては、海外協定校がございまして、海外の協定校や国内の団体等と連携して、高専生のグローバルコンピテンシーや英語も含めたコミュニケーション力を向上させるというところで、地域と高専全体のグローバル化に最終的には貢献できればというところでございます。

基本的には、本校に受け入れた留学生と地元企業様やいろんな団体とどういふふう在海外留学生との交流をしていくのかということとその受け入れた留学生や本校から海外に出て行った留学生を使って、最終的には宇部高専の学生や宇部地域に対して、外国との距離をどういふふう詰めていくのかということが実際にこれから進めていくところということになります。

その実績ですけれども、平成27年度は70名ぐらいの学生が海外に出かけて行ってございまして、29人を受け入れてしております。平成29年度ですと、80人ぐらいの学生を海外に出してございまして、40名程度を受け入れてしております。この人数というのが10年ぐらい前に比べると順調に数が増えてきてございまして、31年、32年ぐらいの目標は海外に出ていく学生を100名、受け入れの学生を40名ぐらいで、これはもう今ほぼ到達できている状態ですけれども、出ていく学生をもう少し増やしたいというところでございます。

実際の参加者数の内訳は、オーストラリアのニューカッスル大学、台湾の国立聯合大学、シンガポールのシンガポールポリテクニク、韓国の永進専門大学、このあたりに今、学生を多く派遣しております。

学年に関しては、ちょっと意外かと思われるのですが、1年生の参加が結構多いです。1年生で参加して、また3年生や4年生、専攻科で参加するという形で、トータルとしてはもう少し。これは春にも派遣の予定がございまして、春の派遣まで含めて大体年間100名を突破する見込みになっております。最終的には、これらの海外での学生の活動というのでも1カ月間ぐらいの長期の研修というのを目標にしてございまして、この中でも約1カ月近くの研修を行っているところでございまして、特にこの4校が今1カ月の留学に対応している、受け入れていただける機関でございまして。

先ほど、高専4.0イニシアチブのところでも申し上げましたけれども、最終的には海外に行った学生に学内で留学に対する興味を広げていってもらいたいというところで、学生のスチューデントアンバサダー活動というのを今年度からやっております。ここでは特にホームステイの引き受けですとか、休日に観光等の案内をして、宇部市ですとか、山口県の魅力をもっと知ってもらおうですとか、あと、異文化交流の地域への展開などというのを目標にしてございまして、今年度ですと、宇部高校とも一部合同で体験学習をやってみたりですとか、トビタテ留学等で参加した学生に中学校で講演をしてもらったりとかをやりました。

次に、校外実習、インターンシップについて説明させていただきます。

インターンシップを長期に実施する目的としましては、冒頭でも申し上げましたが、業務との深い関わり、会社を深く知って欲しいというところと、最終的に1カ月間という長期にわたる就業体験をもって、自分のキャリアデザイン力を向上して欲しいというところと、実際に就職する前の段階で業務に深く触れるというところで、就業後、就職後のミスマッチや、早期の離職を防止するですとか、どうしても学生は、求人票ばかり見て、県外に対して目が行きがちというところもあるのですが、基本

的に長期のインターンシップ、ほとんど受け入れていただいているのは地元企業の皆様でございまして、そこで実際に働く体験を学生にしてもらうことで、地元のことを、会社というのをよく知ってもらいつつ、最終的にはそちらの就職者の数を増やしていきたいというところでございます。

現状でも長期インターンシップにつきましては、長期インターンシップ専用の専属指導教員がその会社に対して、いろいろインターンシップの事前指導とか、事後指導も行っておりますけれども、最終的には教員もファシリテーターのような形で、学生同士で最終的にはそのインターンシップ、後輩にどんどんフィードバックができるようなシステムをつくりたいというのが今後の目標でございます。

28年度と29年度の長期インターンシップの実施状況についてでございます。長期のインターンシップの受け入れが可能ですというふうに御回答いただいている企業が29機関ございます。数が多いのが宇部市ですが、宇部市以外では、山陽小野田市、下関市、山口市と、県内では、割と西側に寄っておりますけれども、西側でこれだけの企業にお願いをしております。宇部市役所様にも今年度お願いしております、学生が大変お世話になりました。

(久保田委員)

こちらこそ。

(教務主事)

このインターンシップの人数が今年ですと本科生20人、専攻科生8人を受け入れていただきました。次に、地域教育の部分に関して御説明させていただきます。

地域教育という科目自体はこれまでもございまして、その地域教育の幅を少し広げました。どういうふうに広げたくと申しますと、地域教育、自ら課題を探す能力と地域に貢献できる何かをやりましょうというところで、最終的にはこれも学生自身が考えるというところで、エンジニアリングデザイン能力につながればというところで、少し幅を広げたものでございまして、従来はものづくり教育と出前授業というところに焦点を当てて地域教育の内容を実施しておりました。これに昨年度から試験的に小中学校における学習支援、コミュニティ・スクールのようなものが加わりました。この活動に関しても地域教育の枠組みで単位認定をできるようにしてございまして、今年度新しく加えた部分がこの地域課題の解決や高齢者の生活支援の部分でございます。

この部分につきましては、基本的に地元企業様ですとか、宇部市様から課題等をいただいて、その課題に対して、学生にテーマの募集をして、希望してくれた学生と学年、学科横断型のチームをつくって、その課題解決に取り組むというところでございます。

この地域課題の解決の部分につきましては、先ほど冒頭ビデオの紹介をさせていただきましたけれども、竹の有効活用、それ以外にも市街地を活性化する方法を考えたりですとか、宇部市の市営バスの利用者を増加するモデルですとか、安全な通学路マップをつくらうとか、このあたりを今年度行いまして、1年生から4年生まで約60名の学生が参加しております。

この地域教育の種類のうち、ものづくり教育はこれまでもやっていたものですが、基本的には小中学校に本校からこういう内容の授業ができますというのを小中学校に前もって出前授業の希望をとらせていただいて、そこで御希望のあった小中学校に時期等を調整しながら、その事業を行うというところでございます。

小学校における放課後学習支援は、昨年度から始めたものでして、基本的には希望があった小学校に対して、ここで学生会の社会貢献部の学生が中心となって活動しておりますけれども、いろんな勉強の内容を小学生に提供するというところでございます。

最後に、地域課題の解決、高齢者生活支援というのが今年度から試行的に始めた部分でございまして、この部分につきましては、武藤教授から別途御説明させていただきます。

放課後学習支援は、基本的には学生会のメンバーとそのサポーターで行っております。週3回程度、1回で40分ぐらいの枠組みで、今年度は岬小学校と上宇部小学校で実施させていただきました。距離的な問題等もあるんですけれども、中学校も含めまして、結構依頼の話はいただくんですけれども、学生は、どうしても移動が自転車圏内というところになりまして、なかなか遠くまでは出かけていくのが難しいという状況ではございますけれども、結構依頼はいただいております。

最後に、地域教育は、社会人基礎力へつながっていくことを御紹介させていただきます。

(AP事業推進責任者)

では、ここからは、私、武藤が、地域課題解決及び高齢者生活支援といった観点に焦点を当てた地域教育についてお話させていただきます。

ここでは、地域課題解決型というキーワードで括っております。この中身をもう少し深掘りさせていただきます。

この取り組みを行う上で、よく、アイデアソンとか、ハッカソンとか、いろいろな集まりがあるんですけども、この取り組みとか、特に私がこだわっているのは、ブレインストーミングとか、課題の整理、あと焦点を絞るところ。ここまでは結構アイデアソン等でやるんですけども、考案をぜひ、やろうと。ぜひ、アイデアを実際形にしてみましようというところ。そこにこだわってやっております。最終的には、またブラッシュアップをするということで、いわゆるPDCAを回す経験を学生にやって欲しいなというのがございます。

そして、学生が主体でやって欲しいところがありまして、教職員からは大きいテーマで与えます。それを実際学生が問題を小さくブレイクダウンしていったって、計画を立てて、その後、実際外に出すためにはいろんな関係者と調整をしないといけない。そういったものを全部学生にやらしてもらおうというふうなストーリーでやっております。

今年度ですが、スタッフ側で準備したテーマは、6つ、5つはございました。この中で、実際にやったテーマは4つです。他の2つは私のほうから結構一押しだったんですけど、学生さんの希望がなかったんです。残念ながら。

チーム構成は、先ほどもお話ししましたが、学年学科横断型でやっていこうということを考えております。実際にはちょっと時間割の関係とか、空き時間を調整しようとかすると、なかなか、こんなにきれいにならないですけども、狙いは学年学科横断型です。

あらかじめ、提示した資料をご覧ください。細かいところは説明しませんが、1つ目のテーマは宇部市の中心部活性化です。ここにありますように、最終目標を示してあげて、どういった成果が欲しいのか。そして、大まかな、ここでは5月から12月にかけて、4回、中間的なゴール含めながら、大ざっぱなゴール、ざっくりしているものを提供していくと。これはまた最後学生がブレイクダウンをしていくという流れになっています。

2つ目は子育てしやすい街づくりですね。次は企業紹介リーフレット、そして市営バスの利用者を増やすマップ。5つ目は、最初冒頭にビデオで流れてました、竹の有効活用で、最後が高齢者の生活支援です。こういったものを学生に提示してやらしてもらおうと。この後、実際取り組んでいる様子を写真に幾つか収めていますのでご覧ください。

1つ目は、5月の段階、これはオリエンテーションをやっているところです。学生は大体大きなテーマを選んで、どういうことをやっていこうかというのを話し合っている様子を示しています。次の6月もまだ続いておりまして、左の図はポストイットにアイデアを書き出してから貼っていているところです。右の2つは、これはバスですね、バスの利用者を増やす話で、地図を広げて、いろいろと検討しているといったところです。

次に、その学生がブレイクダウンしたものの具体的な中身なんですけども、こちらが市街地の活性化と竹とバスと通学路。4つのテーマに対して、それぞれ4つ、5つのサブテーマがあり、合計15個のテーマに学生が取り組んでいるといったものです。

あとは考えた内容を外に出していくといったところで、ちょっと、これは、今のところ、竹絡み云々しかないんですが、1つは9月の下旬に楠こもれびの郷というところで行ったイベントの写真です。

そして、その次が、NHKの番組に出演させていただいたというところ。その中で11月の23日にまた同じく、楠こもれびの郷のほうでイベントをやりますよと告知しました。最後に実際やっている様子となります。

以上、ちょっと、今年度からなっています地域課題解決型の地域教育の様子をご覧くださいました。一番最初に、APの三本の柱として、国際交流とインターンシップと地域教育を申し上げます。

そこで、それと地域をどう変えていくかということなんですけども、まず、国際交流事業に関しましては、外国人留学生と本校の学生を基準にして、地域の小学校や中学校及び企業や自治体と連携をしていきたいと考えております。

そして、これを実際に行うためには、受け入れ先を確保しなきゃいけない。また、やってきた留学生、あるいは、それをサポートする本校の学生の活躍を見ていただいて、特に、多分、企業様は大きいと思うんですけど、ウイン・ウインの関係を築きたいといったところです。

そして、2つ目はインターンシップに関して。ここでは、本校では低学年からキャリア教育を実施しております。これと地域活動の融合を図りたい。

次に長期インターンシップ。インターンシップというのは、本来は就業体験ですから、就職とかと結びつけたらいけませんよというふうな建前はございますが、実際どうなるかということで、実際にいい学生さんがいれば、採用したいという企業さんもおられると思います。そこで、インターンシップと就職への繋がりというものを形づくっていききたいと考えております。

そして、さらに、本校ではUターンの支援制度というものを持っておりまして、一度、大阪とか、東京とか、都市部へ出ていった卒業生がUターンできるようにいろいろと支援を行っております。こういった機会を利用しつつ、地元企業様との関係を強化していきたいということです。

そして、3つ目が地域教育に関することなんですけども、こちらのほうは、先ほど幾つか現実に取り組んだテーマを御紹介いたしました。今後新規課題を掘り起こしていくということで、宇部市様あるいは企業様から、さまざまな、こういった課題があるんだけれども、何とかしてくれませんかみたいな話を持ってきていただくと助かるなと思っております。

以上です。

今最後にお見せしましたスライド、こちらのほう、本日の運営諮問会議のディスカッションの大きなテーマにしたいと考えておりますので、ぜひ、よろしくお願いいたします。

(議長)

はい、ありがとうございます。

今日お話を聞いていると、まずは、すばらしいことをやってらっしゃるから、これからも、ぜひ、頑張ってお話をしていただきたいというふうにしてまとめてしまいそうで。やはり、やる中で、いろいろと課題とか、何が困ってらっしゃるとか、何をどうしたいとか、そういう多分いろんなことのお考えがあるかと思えます。それをあわせて、ちょっと議論をすることが大事かなと思っております。3つテーマを挙げられて書かれておりますので、どうしましょう。まず最初に、国際交流に関して何か御意見等いただいて、次にインターンシップについて、その次に地域教育と進めてよろしいでしょうか。

それでは、まず、国際交流事業について。これから高専としても、より積極的に海外からの留学生を受け入れる。海外に留学生を出すということを進めていきたいんですけどというお話だったと思いますが、何か御意見等ございますか。どちらからでも結構ですし、受け入れているところの問題として、何か御意見があればということも含めて。

(AP事業推進責任者)

それでは、ヒントになるものと思っております。本日の資料の9ページ。こちらのほうに、今挙げております外国人留学生と本校を基準にした地域、企業、自治体、その他との連携といったところの大まかなプランを示しております。

(議長)

一応、ちょっと、私のほうからお伺いしてよろしいでしょうか。

10ページに全体のこれまでの実績とこれからの計画というのをお示しになられて、11ページには、実際に27年度、28年度の、研修先毎の海外研修参加者数が出ているのですけども、実際にどれぐらいの期間で行かれているのでしょうか。

(教務主事)

それぞれのプログラム……。

(議長)

ええ、例えば、ええ、ニューカッスルだと、何週間とか、何カ月とか。

(教務主事)

ニューカッスルだと、ほぼ丸々1カ月ぐらい。

(議長)

いつごろに行かれているんですか。

(教務主事)

8月お盆前ぐらいですか。お盆前ぐらいから、9月の末ぎりぎりまで。

(議長)

じゃあ、夏休みを大体中心として出しているという感じですか。

(教務主事)

はい。

(議長)

ほかの台湾や、シンガポールも大体ほぼ同じような状況ですか。

(教務主事)

同じです。出発日は違いますけれども、基本的に8月盆前に前期の授業も終わって、後期の授業が始まる前に戻ってくるプログラムになっております。

(議長)

全体で、5年間を通して、今この数。

(教務主事)

1年生から5年生に、あと専攻科の学生を加えて、85名。

(議長)

80名ぐらいで。

(教務主事)

はい。

(議長)

ということは、全体の大体何割ぐらいになるんですか。

(教務主事)

専攻科の学生まで入れて、全体の10%弱。

(議長)

将来はそれを大体20%。

(教務主事)

それと100名ぐらいを常時毎年送りたいということです。

(議長)

全体の半分。

(教務主事)

各学年200人で、全体が1,000名ですので、1,000人のうち、毎年100人ぐらいを海外というのを毎年継続して……。

(議長)

5年間いると大体半分は……。

(教務主事)

半分ぐらいは……。

(議長)

海外経験をした学生を出せるというような考え方を。

(教務主事)

というのが目標です。

(議長)

はい。受け入れのほうはどのようなふうにされる。

(教務主事)

受け入れは今、多く受け入れているところだと、台湾の国立聯合大学、文藻外語大学。それから、シンガポールが数名ぐらい。ほかに永進専門大学。留学の期間は長い留学生ですと2カ月とか、1カ月とかになっており、短い学生ですと2週間ぐらい。受け入れの時期は受け入れ先との調整になりますので、ばらばらでございます。

(議長)

それは高専だけではなくて、高専から、例えば、地元の企業様とかいう形も実際にあるんですよね。

(教務主事)

企業は……。

(議長)

今のところは、じゃあ、もう高専で。

(教務主事)

基本的には、はい。校内で取り組みをできるように。

(議長)

なるほど、なるほど。

(教務主事)

はい。そこもできれば、例えば、地域課題の解決の部分とかで、この学生と留学生と一緒にやりましょうとか。留学生受け入れのプログラムを充実化していく部分で、そういうのが一つのポイントになるかなという考えです。

(議長)

実は、そういう話をしたのは、私どものところで、宇部市役所様に実際私どもの留学生をインターシップとして受け入れていただいて、ちゃんと市役所のほうもしっかり英語対応していただいて、市役所というのは、シティオフィスは、どういうことをするのかっていうところを約2週間程度やっていたいていますよね。そんなこともできているので、そういうのもありかなとは思っているところなんです。市長、何か、ありますか。

(久保田委員)

まさに今おっしゃっていただいたとおりでございます。宇部市といたしましても、そういう形では積極的にお受けいたしますので、高専にお越しになられた留学生の方を、また宇部市でということも大歓迎でございますので、ぜひ、御検討いただけると。

(校長)

既にお世話になっています。2年前ですかね、文藻の留学生を1月から1カ月間でしたかね。

(久保田委員)

ありました。

(校長)

ありましたね。今年も、もうすぐ台湾の学生が来ます。

(久保田委員)

そうですか。

(校長)

観光関係のいろいろな文書作成とかでお世話になります。

(久保田委員)



いや、こちらこそ。

(校長)

それから、一つですね、実は最近、シンガポールのポリテクのほうから、日本の企業でのインターンシップも併せて経験させていただけないかという要望がありまして、実際は、なかなかそれは難しく、本校の中だけの卒研体験で終わっているんですけども。どうも海外ではかなりの期間、外国に学生を送って、その企業で働き、インターンシップを経験してというのが相当広がっているようです。そのオファーが結構あるものですから、少しずつでもそれを増やしていきたいなと思っています。ただ、シンガポールの場合やっぱり英語ですので、受け入れ側も英語ができないといけないというところで、若干の制約もありますね。いろいろな保険の関係とかもあると思うんですけども、将来的にはその辺も抱き合わせで、例えば、前半の1カ月は宇部高専で研修、後半の1カ月は宇部市あるいは県内の企業で研修という形で、一つのユニットにすることも考えられるかなと思っています。

(議長)

実際に国内の企業でインターンシップを受け入れるとすると、やはり、少しは日本語を話していただきたいというのは多分あるのかなと思いますがいかがでしょうか。企業の側としては、何かございますか。英語で全く問題はないと言っていたら、それはそれで、すごくいいなと思うのです。

(三隅委員)

宇部興産でございます。企業も我々タイとか、スペインとかに、工場、事業所がございますので、その中で交流をやっています。現実、タイの方は、宇部工場に来て、極端に言えば1年間程います。なので、日本語も英語も話します。こっちもそうです。スペインの方も時々来ます。学校間同士で受け入れし、目的がグローバルコンピテンシー等の向上ということですけど、なかなか、これ、欧米と東アジアではもとの考え方が違うんで、これをどうするのかというのが一つ疑問にあるんです。

海外研修の参加者を見ますと近隣が多いですよ、ヨーロッパとかないですね。我々も今言ったように、スペインがありますので、結構な人を向こうに送り込んだり、いろいろしてきましたが、やっぱりちょっと違うなど。

結局一番いいのは、スペインの人が得意なことをやっていただくことが一番いいので、企業の中では、今、アメリカ側をスペインに任せるとかですね。今まで日本人が一所懸命アメリカへ行って、いろいろとやっていたんですけど、アメリカはいわゆるいろんな民族の集合体でございますので、サラダボールの国と言われてはいますが、そういったところはスペイン人のほうがわかりやすい、文化が。それこそ、動機づけとかも、国際的なコンピテンシーとかというのは受け入れ動機づけにすごくやりやすいので。去年ぐらいから、日本人がいなくなって、スペイン人が向こうにいます。その辺も含めると基本的に交流するというのはいいと思うんですけど、要はKPIですよ。KPI、これ、キー・パフォーマンス・インディケーターですけども、これやって何が得られるのかと。企業はいつでもそれを考えないと生きていけないので、学生のパフォーマンスがどう上がったのかとか、そこら辺を見ながらやられたらいいのかなと。母数を上げるのは賛成なんです。母数を上げて、交流を図っていくというのは非常に重要なことなので。

(議長)



まずは母数を上げて。そうですね、今は、その段階だと。次はK P Iだと思うんですけど。

(三隅委員)

はい。企業の、冒頭の質問で言うと、企業へのインターンシップというのは全然拒否していませんので、御縁があれば、場所があれば、幾らでも受け入れるというスタンスはございます。

(徳永委員)

セントラル硝子の徳永ですけれども、当社も既に海外のインターンは受け入れています。宇部興産さんと同じように長い人は1年の海外インターンシップ受け入れですね、そのままうちに就職する人もいます。それで、うちの場合も、アメリカ等にもガラス工場ありますので、そちらとのパイプ役とか、そういうことがあって、就職する人もいます。

結局企業なので、何のためにインターンシップを受け入れるか。日本に来るインターンシップの人は大抵そこそこの日本語は話せますので、話せるぐらいのモチベーションのある方が来る方が多いので、言葉は、こちら英語であれば、対応できます。

一番は、企業でインターンシップを受け入れる時に、この人を受け入れて、会社として、何のプラスになるかというのがあるわけです。やっぱり、ガラスに興味があるとか、うちであれば、科学のフッ素に興味があるとか。そういうことがなく、ただ、受け入れるとなると、ただの遊びになっちゃうんですね。目的意識を持ってインターンシップを受け入れたいということがありますから、我々企業が何を求めているのかということと、そのインターンシップさんがうちに来て、何か得るものがあるかなというところのマッチングがうまくいかないと、なかなか結果が伴わないということもありますね。これは、私の意見です。もし、三者でやるとすればですね。

ただ、企業としては、もう既に我々もインターンシップを受け入れていますので、インターンシップを受け入れることは全くできませんとか、やったことないとかは、全然ありませんから。三者にウイン・ウインのものがあれば、誰でも、うちの会社、工場で、受け入れることは可能なので、その辺は御理解いただきたいと思います。

(議長)

今のお話すごく重要で、やっぱり、何のためにという目的意識というのは当然そうで。やはり、宇部高専の中での教育で、こういうことに興味がある学生、もしくは、こういう興味がある学生を海外から受け入れているので、この学生を是非というような流れができてきているというのは、多分大前提の話ではないかなとは思いますが。

あと、大きな企業様はそういうことだとすれば、小さいところだと、木村理事長どうですか。例えば、宇部の地元の企業で受け入れというようなことは、

(木村委員)

中小企業だったらですね、実際インターンシップ、研修制度がありますね。海外研修制度がありますので、そこで、実際に働いていただくということが多いいんじゃないかと思えますね。大体は危なくないところに置いて、学生さんはインターンシップをやられるんじゃないかと思うんですけど、そこを本当に入って業務をやっていただくためには、安全な保険とかの問題もあるでしょうし。この辺はどうなのかなということとは、ありますけどね。

中小企業のもは、どっちかという、宇部高専から受け入れるというのを、いわゆる研修制度をもとにして受け入れているんじゃないかと思えますね。

(議長)

今のお話、国際交流で受け入れるだけではなくて、もう一步踏み込もうとすると、今の木村理事長のようなお話も一つ考えないといけないとか。あとは、できれば、本当に地元の企業に。また、後で安部理事長のお話があると思えますけど。地元の企業様に、もっと、ちっちゃいところにも引き受けていただけるような仕組み。逆に言えば、そうすると、もう本当に一つの戦力として来ていただく方が、どうかと思います。どうでしょう。

(安部委員)

地元の中小は人を欲しがっていますので、本当に例えば、高専の方々に、そのインターンシップの延

長線上で就職が決まることが大いにあると思う。だけど、インターンシップの中で、海外の留学生というのは、ちょっと僕は違うんじゃないかなと。先ほど木村理事長が研修っておっしゃいましたが、それはあくまでも、もう勤めるつもり、2年、3年というスパンで仕事を覚えて帰っていくという研修制度ですので、インターンシップとはちょっと違うと思う。あくまでも、僕はその市内の中小企業の場合は、インターンシップを受け入れるということは、まずは中小企業を学生さんに知ってもらうということと、その延長線上で、願わくば、就職してもらうというのが大目的だと思います。ですから、中小企業の方で、まずは知ってもらうためにどんどん受け入れてもらっているんだけど、その中で先ほど言われた保険というのは物すごく気にしています。ですから、以前、私どもでマスター、山大の人でマスターを卒業したんだけど、一月ほどインターンシップで雇ってくれないかと。つまり、マスターじゃない、もう卒業したので、大学の管理じゃないんですね、フリーなんですね。それをインターンシップという言葉は保険が宙ぶらりんになるから、会社としても受け入れられないということで。やはり、インターンシップで受け入れることは労災というのを非常に気にしますので、安全面と保険に関しては素性をはっきりさせんと。極端に言うたら、いくら人が良くても受け入れられないと思いますね。そこはちょっと注意していただいたほうがいいんじゃないかな。

それと、もう一つ、先ほどKPIという話がありまして、裏返して、どんどん年間の海外経験者、これ、増えていっています。増えていっている中で、まずは海外経験者を増やすことがまず第一義だよと。その次に高専生として海外で短期間一月、せいぜい長くても一月なんだけど、その間で何を求めるのか。ですから、一月の短期間だけでも少なくとも語学力をここまでだとか、そういうのが単位を与えるものの裏返しのようなものが欲しいような気がいたします。以上です。

(議長)

今の議論はどちらかと、留学生のインターンシップです。話題を変えて、今度は日本人のインターンシップという話も少し議論したいなと思っています。まず最初に、例えば、国際交流事業の中で地域の小学校とか、中学校へのインターンシップというか、海外から来た学生に紹介等がありますが、師井先生、何かありますでしょうか。

(師井委員)

はい。この前、地域の方から、フィリピンから子供が来たから、2週間だったかな、英語しかできないんだけど預かってくれないかって言われて。ちょうどいいですよって言って。学生服とか、全部用意してあげて、気持ちよく教室に入れた。異文化にその子が接するわけで、ほかの子も全く英語ができないわけ、どうなるんだろうって見てたんですが、やっぱり、子供ですね、触れるんですね。気持ちの問題というか、身振り手振りで気持ちよく、2週間いろんな意味で、その子にとっても良かったし、周りの子にとっても良かったし、ぼっと頼まれた時に、そういう経験ができれば、本当にとっても良かったなと思っています。

宇部市はニューカッスルに毎年夏休みに行きますけど、こういう子供たちが帰ってきた時の意見を聞いても、たった2週間であるが、本当2週間、されど2週間、素晴らしい体験しているなどは思っています。

かくいう私もですね、昔、宇部市の事業でニューカッスルの小学校に行かせていただいたんですよ。あの経験は大きかったですね。異文化での教育について考えさせていただくという面では、子供と触れ合うことで、素晴らしい体験をさせてもらいました。本当、ウイン・ウインの関係が続くという意味では、この国際交流事業というのは非常に大事な要素もあるし、これからグローバル社会の中で生きていくという教育の面においては、非常に大切な要素だなと思っています。

(議長)

何かありますか。

(教務主事)

外国人留学生と地域の小中学校の連携に関して、これは来年度から試行的にできないかということで検討しているところではあるんですけども。先ほどの台湾、文藻外語大学では、日本語もある程度できて、現地で基本的には外国語を教える先生を養成しているような学部がございます。そこから受け入

れて本校の中で教育実習のようなものができないかと予定しております。基本的に半年ぐらいの期間、受け入れる予定にしております、本校の例えば英語の授業のアシスタントのような形でも入ってもらう計画なんですけれども、それだけでなく、地域の小学校とか、中学校へ、ALTの先生のサポートのような形をとり、英語ができる、日本語もできる外国人の先生を派遣できないかということのを別の教員が調整させていただいているところかと思えます。来年度から多分お願いすることになるかと思えますけれども、また、よろしくお願ひ申し上げます。

(議長)

はい、どうぞ。

(久保田委員)

もう、ぜひ、こちらからもお願ひをしたいと思えます。実は今私どもも検討しておりますのは、24の小学校が小学校区を持っていますけれども、コミュニティ・スクールが全部入っております。これまでだと、ややもすると、学校に、イベントの時はお手伝いに来てもらうのは地域の人だったんですが、今、こういうコミュニティ・スクールに強化をしていくという時代。地域と一緒に学校が歩いていくということで、例えば、英語のモデル校とか、そういったものもきちんとできれば。今、地域でも非常に盛り上がっている地域がありますので、そういったところは、地域の人でも小学校に行き、小学校の英語の授業と一緒に参加ができるとかですね、そういう地域のグローバルゼーションをコミュニティ・スクールからもできるのではないかというふうに考えておりますので、そのときの人材をどうするんだということで、今、もう渡りに船でございます。教育長ともそういう話を今協議をしておりますので、ぜひ、こちらからもまた、具体的なお話をさせていただければと思えます。よろしくお願ひいたします。

(議長)

余り時間もないんですけど、ちょっと一つだけ教えて欲しいのは、受け入れの話はだいぶ出ましたので、送り出しのほうについて。送り出す時にですね、送り出す学生のケアの問題とか、非常時の対応はどういうふうに今やられているんでしょうか。

(AP事業推進責任者)

送り出しのほうに関しましては、行く前に事前研修に学生は3回、参加する形で行っております。教員は現地までの行き帰りのところだけ引率をする。滞在中は基本的に向こうの方にお任せ状態となっております。

たまには、ちょっとしたトラブルも起こったりもします。今のところ、生命の危険がとかいうのはないんですけど、やはり、年齢的にはどうしても若い学生だと、15、6歳も含まれますし、やんちゃな盛りでもありますので、ときどき、向こうでやらかして、通報が来たりとかですね。ということもたまにあります。でも、それほど多くはない。多くの学生さんはうまくやってくれる、といった状況ですね、現状は。

(議長)

お伺いしていると、出せば出すほどリスクも上がるわけで、当然KPIの話もあるんですけども、やはり、保護者がいらっしゃる学生を出すわけですから、やはり、保護者対応というのは必ず学校としては要求されると思えます。かくいう我々も全く同じことを悩んでいて、我々保険会社と契約をすることをし、エマージェンシーカードを必ず持たせると。いざとなったら、そこへ電話すると、そこが例えば、日本語の病院を紹介する。日本語の対応をするようなところは決して安くはないんですけど。それを全部学生負担ではできないのでということをやっているものですから。これは実は宇部興産のほうからお伺いして、海外に出す時は必ずそういうことをさせるよとおっしゃっているのを聞いて、我々も始めたんですけど。

(AP事業推進責任者)

そうですね、確かにリスクがありますので、派遣先での事故とかですね、もしもやってしまった場合の場合の対応は確かにおっしゃられたことと同じように、保険会社のほうと契約し、リスクに対し基本的には体制を作っています。

(議長)

いざとなる時は、自分たちも行かないといけない、親も行かないといけないということが多分にあります。実は我々の経験として、ちょうど数年前にデング熱がはやり代々木公園でデング熱が見つかった時に、ちょうどうちの学生もデング熱にかかってですね、今、このタイミングで帰ってくるとニュースになるからちょっと待てとか言って。そんな経験もございますので、やはりちょっと注意がいるのかな。やっぱり、学生ですから、行きたい、いろんなところに遊びに行きたいというのは、それは大事なことだと思うのですが、そこはちょっと注意がいるのかなと思っておりました。ありがとうございます。

次に移らせていただいて。外国人のインターンシップが先に入ってしまったんですが、日本人のインターンシップで、企業に行くインターンシップになるのですが、どう地元企業と連携をするといいのか、そういうことに関しまして、何か御意見等いただければと思います。私ども工学部も今、本当にたくさん、たくさん来ていただきたいと言われてはいるわけですが、最近すごく怖いのは、ワンデーインターンシップというのがすごく多くて、あれはインターンシップと言わないだろうと。企業紹介とか、名前を変えてくれと言っているんですけど、そんなことが今、実は結構あって、ちょっとまずいなと思っています。どう、何か。

(三隅委員)

今までは研究職が多かったかなというふうに思うんですね。高専さんにしても、山大さんにしても、我々のところの研究所のところに来ていただいて、いろんな実験のお手伝いとか、そういうことをやる。先ほどの労災の問題とかがありまして、なかなか工場にフリーで長いこと入れるのは難しいなということになりますので、どうしても、そういう形になるのかなと思うんです。けれども、もう今からは完全な売り手市場でございます。どうしても就職と結びつくんですけど、我々が選ばれる時代に入っていますので、いかに我々はお受けして、企業の将来の姿をお見せするか。学生さんにですね。そういうことに注力していかなければいけないところに入りつつあると僕は認識しています。ですから、そういう労災の問題も含めて、企業側は努力する部分も今から大変努力していかなければいけないと思っています。逆にそれは、こんなこともしてみたい、あんなこともしてみたいということをリクエストしていただいて、我々が応えるということになるのかなというふうに思っています。ぜひ、我々、来る者は拒まずといえますか、ぜひ、来ていただいて、経験していただくのはウエルカムですので、また、その辺はお話をお受けしたいと思っています。

(教務主事)

先ほどのワンデーの部分、ちょっと補足させていただきますと、本校インターンシップとして認定しているのは2種類ございまして、5日間の体験で1単位、18日間以上の体験で3単位という形で出しており、原則一つの会社で5日間とか、18日間行くことを指導しています。1日、ワンデーのインターンシップに5日間行ったからといって、本校1単位の単位を出しているのものではなく、基本的には一つの会社でたくさん体験してくださいという考えです。

(徳永委員)

うちは、先ほど三隅さんが言われたとおりで、学生さんを集めるほうが大変なんで、インターンシップに来てもらって、うちの会社をよく知ってもらおうということが大事ということで、インターンシップは重要だと思っています。

5日間と18日間だったんですけど、こちらサイドからしたら、やはり、長くいて、1カ月がちょうどいいと思うんですけど。それぐらいはいて欲しいなというのはあります。5日間だとやはりよく知ってもらえないというのがあるので、長くいて欲しいと。

あと、ワンデーのことがありましたけど、これも人事部から聞くんですけど、さっきの留学生の数を集めるようなところがあって、とにかく知ってもらわなきゃいけないというのが。また、うちなんかは特にそんな知名度がある会社じゃないですから、知ってもらうためにワンデーでも来てくれれば、うちの会社を知ってもらえるというのがあるというのは、これに大きな期待をして、その部分が主なので、そういうのもあると思います。このことの善し悪しというのはいろいろな考えがあるんじゃないですか。

あと、これも逆にお願いで、去年も言ったような気がするんですけど、その後のフォローですね。セ

ントラル硝子行ったけど、何か、こういうことを期待していたんだけど、教えてもらえなかったとか、もちろん労働安全のことがあるんで、余り危険なことではできないんですけど、もっと、このあたり知りたかったんだけどちょっと、とかいうのあれば、できる範囲では対応できますから、そういう情報を逆に欲しいなというのはありますね。先ほど言われたように、インターンシップをベースに労働力を確保したいのは、どの会社もそう思っていると思いますので、前向きにやっていければいいなと思っています。

(議長)

何か、日高先生何かありますか。

(日高副校長)

多分そういったこともちゃんと吸い上げていて、回したはずなんですけどね。済みません。

いえいえ、私が知らないだけかもしれない。

(議長)

あとは、いわゆる、どれぐらいの例えば卒業に近い学生のインターンシップなのか。これから専門教育に入ってくる、興味を持たせる時のインターンシップなのかという……。

(徳永委員)

地域密着がありますよね。宇部高専さんなんかは、うちの会社ですと早い時期のほうがいいのもありますし、いよいよ就職決める前に2回来られても別に悪くはないと思いますけど、よその大学の方はどうしても就職前というふうになってしまうと思うんですけど、地域密着であれば、1、2年生の時に、こんな会社があって、こんなことをやっているんだと知ることが愛着といいますか、はっきり出てきますから。

(議長)

やっぱり、近くにあるけど知らないっていう、結構ありますよね。

(徳永委員)

それは多いです。

(議長)

はい。という気もします。

(AP事業推進責任者)

今のお話だと、山口県インターンシップ推進協議会がございまして、そこを経由すると応募できる学年が絞られてしまうんです、現状は。大学だと3年生に限る。高専だと4年生に限るというふうな条件があります。ですので、あくまでも提案なんですけども、別に交渉させていただいてもよろしいか。

(徳永委員)

社会的に問題なければ、問題ないと思います。だから、5日間と18日間があるとすれば、1年生か2年生で5日間をやって、高年次生で18日間を就職前にもう1回行くというようなやり方もあると思うんですよ。ただ、こと就職のことですから、いろいろと規制がある可能性もあるので、それは遵守しないといけないですので、それに準じてあればと思うんですけどね。

(三隅委員)

インターンシップ協議会は、この二、三年で環境が随分変わっています。我々の企業の環境が全部変わっていますんで。私たち多分それを無視して今言っていると思うんですけど。(笑声) 逆に言うとスピードについていけないかもしれないんで。今、目の前すごい人手不足でございまして、特に工場なんかはひいひい言っています。もう2年ぐらいたったら、がらっと変わります。

(久保田委員)

よろしいですか。3、4年前ですか、インターンシップの御提案をこの会でされて、それからすぐに本市も長期インターンシップ制度を大きく見直しました。それまで定型的業務でのインターンシップ、市役所の業務体験をしましょうみたいなところだったのをプロジェクト型へ一気に変えました。少なくとも2日という基準にはしておりますが、基本的には3週間の間、宇部高専の皆さんも、本当に積極的にとときわ公園であったり、中山間地域に入っていたりとか、また、あとのテーマでもある地域課

題に向き合うプロジェクトのほうに入っていただいて、非常に大きな力になり、また、そういう中から宇部市に就職された方もいらっしゃいます。ですから、こういったプロジェクト型の成果が見える、そういうインターンシップに、非常に私ども、こういう方向にこれからますます充実をさせたいと、30年度もそういう方向で考えております。さらに、今、考えていますのは、地域おこし協力隊のインターンシップ版のような形で、もっと、インターンシップにプラスして。工学部の学生さんにしても、高専の学生さんでも、結構アルバイトで飲食関係に市内でよく御姿を拝見するんですけども、ですから、そういう、もちろんそれも選択肢にある町ではありますが、少し臨時職員的な地域おこし協力隊ですね、言ってみれば、そういう形のものもできないだろうか。インターンシップは授業の中でやっていく。その経験をした人が今度は次の年にはアルバイト的にそういったプロジェクトに本当にチームとして入っていく。これは本当にハードで、もうお客さんじゃ済まないの、一緒に交渉もやっていくことになります。後に出る地域課題解決にも直結して、論文が書けるぐらいになるんじゃないかなと思っています。今は、宇部市役所の再任用の職員であったりですね、公募はしておりますけど、なかなか若い人が入ってられてなくて、若い人枠をとって、そういう有償の地域おこし若者隊のようなものにできると、地域定着とか、ふるさとへの少し帰属意識とか、あるいは企業ローカルベンチャーとかですね、そういったものにもなるのではないかと。インターンシップを今ステージアップしたことで、ちょっと見えてきたところなので、また、ぜひ、一緒にちょっと協議をさせていただければと思っています。この会議で提言されたことが、今、本市にとっても非常にいい流れをつくっていただいているし、学生たちは応えてくれているといふふうに思っております。以上です。

(議長)

ぜひ、臨時職員として……。

(久保田委員)

そうなんです。アルバイトに。

(日高副校長)

ありがとうございます。町にそういった地域教育の雰囲気やちょっと出てきたのかな。

(久保田委員)

そうですね。

(日高副校長)

インターンシップのほうも、本当にインターンシップをつくった時は、もう何か、何をやらされるんだというのがあったんですけども。今、本当にやっとベースができてきたというところで、宇部高専、宇部地区、山口県のまた新しいインターンシップのあり方とか、地域とのかかわり合いとか、そこら辺をちょっと模索するのが次の地域課題になっていくと思うんです。本当にそういったわけのわからない学生が出て行っても、宇部市って、こんな町なんよねっていう、そういう雰囲気はですね、もうちょっと市とか、商工会議所とか、この辺をですね、ちょっとまたいろんなところで紹介していただいて、それで宇部市を盛り上げていけるかなというふうに思うので、そこら辺また考えてください。

(久保田委員)

こちらこそ、お願いいたします。

(日高副校長)

先ほどの国際交流ですけれども、学生はやっぱりアメリカとか、ヨーロッパとかに行きたいんですけども、経済的な問題があり、どうしても、10万円そこそこぐらいしか出せないものですから。オーストラリアに行くというと、やっぱり、40万、50万円コース。ハワイとか、その辺もそれぐらいになってきちゃうんですよ。

(安部委員)

市のほうで、スペインと。

(久保田委員)

そうですね。

(安部委員)

どうぞ。

(久保田委員)

宇部高専さんとの御縁で、今、スペインのカステジョン市と、ほぼ本市と同じ人口規模のところと姉妹都市締結に向けての準備を、これはもう議会の了解もいただいている、もう4年前からしてきています。そろそろ本格的にということで、向こうの市長さんも2代にわたってそういう要請を。正式な要請書もいただいております。山口大学のほうもカステジョン市にある大学との締結を去年の12月に済まされていて、若者の交流をやっていったらというふうに今考えています。ニューカッスル市は中学校でやっておりますが、もう少し高校生、大学生、その世代で。ちょうどカステジョン市には、専門性の分野、国立の非常に歴史のある、はっきり言ったら料理学校なんですけども。高等4年間で資格をとらないとシェフや料理人にはなれないと、寮もあったり、インターンシップ制があり、いろんな分野での非常にアカデミズムとして、レベルの高いことを、職員も見てきておりますので、先ほどおっしゃった派遣する上でも、レストランも持っているということなので、いろいろ多面的展開ができるんじゃないかと思っておりますので、また、これも一緒にちょっと御相談させていただければと思います。

(日高副校長)

すき間に。

(久保田委員)

はい。お願いいたします。

(議長)

あと、少し話が進みますが、インターンシップのUターン支援ですね。これは安部委員ともずっとお願いしていて、やっぱり地元の商工会議所がぜひ中心になっていただいて、地元に戻りたいという人はたくさんいるので、ぜひ、お願いしたいなと思っています。

(安部委員)

これは前回は申し上げたところですけど、Uターン希望者には会議所のメンバー企業さんに紹介することもございます。冒頭言いましたように、中小企業は本当に人手に困っています。新しい仕事がないという企業さんもありますので、ぜひ、そういうUターン希望者おられましたら、我々商工会議所を利用していただければいいかなと思っていますので、よろしくお願ひしたい。

(議長)

木村委員、何か追加でありますか。地元の企業とのインターンシップを。

(木村委員)

今、Uターンの話がありましたけど、いろいろ募集した時に、割とUターンされる応募者の方がおられて、誰から聞きましたかって尋ねると、先生だという話は結構聞きます。そういう案件の人はたくさんおられるんじゃないかと思うんですけど。これは宇部高専さんの何かの部署にデータベースがあって、それを誰かに紹介するような形になっているんでしょうか。

(キャリア支援室長)

キャリア支援室長を務めております礎と申します。お答えいたします。

キャリア支援室のほうで、サポートいただいているコーディネーターの方がいらっしゃるんですが、そちらと学生課で、Uターンを必要とされている企業の方々の調査というか、大体年初めぐらいにどうですかというような状況を伺っておいて、情報をいただいているということをしています。学生さんのほうは、就職して、その後戻ってくる際に、例えば、担任の先生であるとか、あるいは卒業研究を受け持っていた先生の方に大体最初にお話が行くんですけど、その後、キャリア支援室のほうで、こういうふうにとまとめているところがあるよと情報提供しております。

(木村委員)

実数として、帰りたいという学生は大体1年で何人ぐらいおられて、何人ぐらい紹介されてといるか、おおよそ、どのぐらいなんですか。

(キャリア支援室長)

もちろん、その年によって違うんですけど、そこまで多くないですね。二桁いくか、いかないかぐら

いの形なんですが……。

(日高副校長)

一応ね、今年度が10人ぐらい。

(木村委員)

10人ぐらいおられるですか。

(日高副校長)

一応、紹介したのは10人ぐらいで、五、六社は紹介したんですけども、ただ、きちんと結びついたのは、今年度はないです。昨年度はあったんですけども。

(キャリア支援室長)

2社ほどお話を……。

(日高副校長)

2社もらってるの……。

(久保田委員)

よかったですね。

(木村委員)

宇部市内ですか。

(キャリア支援室長)

宇部市内だということです。

(日高副校長)

だから、一応ですね、職業斡旋というのは、学校ではできないので、やっぱり、卒業生にもできないんですよ。

(木村委員)

そうなるんですか。

(日高副校長)

そうなるんですよ。ハローワークに通さないといけないんです。だから、こっちはあくまでも紹介する。ですから、ホームページも基本的には同窓会のホームページには書いています。小さく。そういったようなところから情報を取ってきて、基本的には、昔は先生だったんですけど、今は、キャリア支援室をつくっているの、そこに卒業生がちょっと相談に来る。企業の方々も、知った先生からとかT&Bとかから、ちょっと、とりあえず登録してよと言って来る。そういったような形でいろいろと難しいです。(笑声)

(議長)

ありがとうございました。これは、お若い人が多いんですが、それとも、ある程度、シニアになった人が多いですか。

(キャリア支援室長)

比較的多いのは3年未満が多いんですが、先ほど日高先生がおっしゃられたように、実は、昨年の10月、11月ぐらいから、少し増えまして、その時には、8年とか、5年ぐらいという方もいらっしゃいました。

(議長)

宇部の出身で、企業のトップでやられてきて、また戻りたいとかいう人もいらっしゃるのではないかと。いろんな話を聞くと、シニアになると給料も下がるし戻りたいなんて人も結構いるので、そういう人たちもこれから出てくるのかなと思っています。ぜひ、ぜひ、そういうのも、ちゃんとチャンネルになっていくと、しっかり税金も払ってくれるし……。 (笑声)

(日高副校長)

それは市のほうの協力を。

(久保田委員)

そうですね。

(議長)

働きやすいし、仕事もあるしみたいだったらいいですね。ええ、本当に。

(日高副校長)

空き家対策等で。

(久保田委員)

そうですね。

(日高副校長)

ちょっとシニアの力を借りて。

(久保田委員)

そうですね。

(議長)

はい、じゃあ、ちょっと時間も来ているんですが、最後の課題、地域教育に入ります。新規課題の掘り起こしは、もうちょっと具体的に言うと、どういうことを考えたらよろしいのでしょうか。

(教務主事)

例えば、先ほどの竹の例ですと、学生は基本的にある程度形に出るところまでというんで1年間でまとめて、その次の年にまたその上の課題をという形もあるのかなと思うんですけども。いろんな課題が並行してあると、学生もいろいろ選びやすいのかなというところがあって。先ほどの竹ですとか、ああいうレベルの課題を我々もなるべくたくさん用意していきたいなというところなんですけど。

(議長)

今おっしゃるには、課題を一緒に考えてほしいという理解ですか。

(教務主事)

今こういう困った状況です。

(議長)

なるほど。

(教務主事)

こちらとして、どうやって解決できるんだとか。

(議長)

だから、ニーズが欲しいということですか。

(教務主事)

そうです。

(安部委員)

実際の地域教育の中で、何か地元の中小企業を紹介するチームがありましたよね。その方々たちは、地域の中小企業を紹介するプレゼンテーションを何社かやったんだろうか。今度高専の中で、それがどういう回り方をしているのか、非常に興味があるんですけどね。

(AP事業推進責任者)

はい。申し訳ございません、今年は、そのテーマを掲げておいたんですけど、私は一押しだったんですけども、学生が誰も手を挙げず。(笑声)ただ、他の大学あるいは高専では、ほぼ全部で学生がいましたよ、確かに。私が最初に見たのは新潟のほうでやっていました。

(安部委員)

九州の大学で、学生の起業家を募集していると。学生時代に、企業を起こして失敗してもね、極端にいったら何とでもなると。学校として、起業する単位を与えるという話を聞いて、福岡は構造特区になっているから、余計盛んなのかもしれないが、そういう考えもあるんだと思いました。

(議長)

山口でも我々も興味があります。すごく興味があります。実際そういうことをやれと言われておりますし、こころざし道場というのをつくってございまして。

(安部委員)

九大は卒業生を実際にメンターとして、そういう講座に送り込んでやっているらしいです。私も具体的にどういうやり方をしているかわかりませんが、実際に教室の中で、起業家のコンテストみたいなことをやっているとなんな話を聞いたことがございますけど。

(議長)

それに近いものが私どももございます。実際そこで優秀成績を出したものは、そのまま製品化できないかとかいう議論までやっていますんで。

(日高副校長)

宇部市が一応出している。

(久保田委員)

そうそう。

(議長)

イノベーション大賞もありますから。

(校長)

北九州高専で似たような例をやっています。この間、テレビで放送されたのは、何か、大型ロボットで、足のおいにお鼻がせて、臭うとひっくり返ると。それが商品化されているとかありますね。いろいろなそういうロボット系のものを開発する部屋があって、それは確か企業になったと思いますけども。少しずつ高専でも出てきてますので、うちもまねできないことはないと思いますけども。

(木村委員)

地域ニーズというところで、我々は産技センターで企業ニーズとなるんですけど、企業ニーズの場合はいわゆる高専さん、卒論の話があって、専門性を生かした企業ニーズで卒論をつくって課題を解決するというのがあると思うんですけど、今回この地域教育というのは、逆に専門性じゃなくて、社会的なニーズを捉えてということなんではないでしょうか。ちょっと、そこら辺の区別とかが、少しわかりにくいかなというのが、あったんですよ。

(教務主事)

基本的には卒業研究とは別の科目です。先ほどの竹の例ですと、一つの竹を有効活用するという活用方法もいろいろありますし、その方法によって、学生がこれまで勉強した内容をどう使うのかというところでも、また出てくると思います。場合によっては、いろんな学科の学生が協力してやりますので、例えば、回路をつくりながら、実際に機械もつくるし、コンピューターも動かせば、戦略のようなどころまで出るとかという形で、学科にもとらわれませんから、いろんな人が自分がこれまで勉強してきた知識をいろんな人と組み合わせて形にするというところで、卒業研究とは全く別の取り組みでございます。

(安部委員)

にぎわい宇部でやってもらったんですが、結局、我々人数も限られているし、高専さんのチームにイベントをお願いしたんですね。ちょっと予算的なものにはにぎわい宇部が出したと思うんですけども、高専の方々のグループで独自にイベントを考えてもらって。高専さんのグループみたいなのがたくさん、ほかの団体さんもありますから、そういうので、一つのイベントが形成できたという実績がありますね。ですから、我々その年寄りが考えるよりも、若い人たちのアイデアで、例えば、半日なら半日のにぎわいをどうやってつくるのかな、そういうのは大いにテーマになるのかな。我々としても、町のにぎわいという意味では、大いに助かるなというのがございました。それを実際やっていただいた。

(久保田委員)

宇部市はこの資料の41ページの下に入れていただいていますように、先ほど、インターンシップの時にも言いましたが、この高専さんの地域教育ということにおいて、やはり、社会を見てほしい。社会の現実を学び、そして、その場に身を置いて、若い自分なら何ができるか。あるいは、自分の人生でこれからどういうミッションがあるのか。そういう場にさせていただく。そして、もとより行政にとっては今お話がありました若者のアイデアであったり行動力に触発されて、職員も住民も元気になるといいう。日常の生活をしていると自分の世界だけですから、中山間地域がどれほど疲弊しているか、そして、

町なかの商業者がどれほど苦しんでいるか、あるいは、地元の大手企業さんでも、こんなに人手不足で大変なんだ、あるいはグローバル戦略をこんなにしてるんだ、というようなことは、やはり、地域に出て見えてくるんですね。それで、やっぱり、基礎自治体はそういう役割を若い高専の学生の皆さんに御提供ができるフィールドだと思っています。今、これまで以上に、オープンイノベーションという山口大学の山口地域イノベーション機構といろいろ連携もさせていただきながら、こういった課題を表に出す。そして、人も技術もお金もややもすると縦で流れているんですね。役所だけではなくて、地域社会も縦になっている。ですから、それをフラットに見える化していくようなところを町なかに少しずつ展開をしていこうと。そういうところがやはりインキュベーション機能を持つことになるし、資金は行政も出しますが、民間の、今マイナス金利でかなりある、たくさんの方のそういった資金の投資先を探していらっしゃるところと目的も一緒になるかなと思っていますので、ぜひ、この外部機関との連携。先ほど申しましたように、より一層のインターンシップから、また、地域おこし協力チームの高専版という、そういった、またアルバイトでも結構ですし、そういったところもやって、この体験等、それから、ふるさと愛とか、そういったことにもつながってもらえればいいかなと思っていますので、よろしくお願いいたします。

(議長)

どうぞ。

(日高副校長)

そういったところをやるために、市、行政としてはそういったことができる規則を整備して欲しいというのがあります。例えば、テクノロジー×アートで、結局今、山口市のYCAMにいろいろ協力していただいていますけども、宇部市と山口市が協定を結んでたから、何とか上手くいっているんですけども、もう少し見えるようにしてもらったら、私たち工学部も高専ももうちょっと動きやすいかなと思います。そこら辺がですね、もう少し頑張って、規則を整備していただければというふうに思います。よろしくお願いいたします。

(議長)

あと、私なんか思うのは、高専の先生方も山大の教員もそれが専門家じゃないものですから、専門家じゃない人たちが、それをどう指導するかというところを、ぜひ、この地元のニーズというのを教えていただきたい。それをしないと、本当に教員が疲弊してしまう。そこまで我々がせんといかんのかというのはあると思うんですが、これはどうですか。議論が要るんじゃないですか。そのためにどういうふうにこれからしたいとかお考えがあれば教えていただければと思いますけど。

(教務主事)

これに関しては、やっぱり、主役は学生という。こちらが教える、我々が主役というわけではなくて。

(議長)

それはすごく苦手ですね。

(教務主事)

ですから、私どもも、もちろん教えるという力をファシリテートするという方に、私たちも方針を少しずつでも変えていかないといけないというところはございます。

(久保田委員)

そのために、このCOC+というナショナルプロジェクト、皆さんサインをされて、コーディネーターも配置されて、山大におかれましては、山口だ、宇部だ、山陽小野田じゃないはずで、私どもも頑張りますが、COC+をやってらっしゃるんだとしたら、自ら変革をしていかれるということへ踏み出すということですね。

(議長)

はい。市長、そこに来ますか。

(久保田委員)

ええ。自らというのは、みんなですよ。みんながそれをやらないと、COC+を採択されましたって、山口市でみんな揃って、顔合わせしてやりましたよね。あれはかつての昔の話だったじゃないわけ

ですから、規則はもちろんですけど、COC+で、基本的にはみんな一緒にやれる筈ですから、もう1回原点に戻りましょう。そして、もう一歩も二歩も私たちは踏み出さないといけないという、それぞれが特に公的なところにいる者はその責務があるかなと。じゃないと、COC+の期限が迫ってくる中で、成果が十分出せないことになるのではないかと思いますので、頑張りましょう。

(議長)

校長先生、何かありますか。

(校長)

今回の我々のカリキュラムの大改革は、教室で今までのような教え方をしているだけではなくて、やっぱりフィールドに出て学生が活動すると、教員も一緒にフィールドに出なきゃいけないということですよ。私、大学院の時に、修了式で、学長から、「博士というのは「ひろし」と書くんだと。でも、日本の場合には狭しになっていると。博士になったら、どんなテーマでも、方法論を身につけているはずだからできるはずだ」と、いうふうに言われたことがあります。確かにそうなんですけども、卒業研究というのは意外に簡単で自分の分野のことをやっていけばいいわけで、上下関係がですね。これからは、やはり、上下関係じゃなくて、学生と対等で同じように問題に向き合う必要があると。そういう方向に教員も変わっていかなければいけないのではないかなというふうに思っているんです。ただ、校長は現場に出ていけないので、若干無責任な言い方かもしれませんが、先生方には、やはり、少しずつでも学生が生き生きと地域で活躍できるようにサポートする、そういうふうな教え方というか、これまでと違うものを探求していかなきゃいけないので、学生にとっても大変ですし、教員にとっても大変な時代に入ったなという感じがいたします。

(議長)

校長先生がおっしゃったように、今、高等教育機関も方向を変えてきていることを、ぜひ、本日参加いただいた委員の先生方にも御理解いただいて、サポートをお願いしたいということですね。

(校長)

社会の皆様方にいろいろな御意見等を御協力いただければ、非常に、この思いが通じて、さらに前進できるのではないかなと思っています。

(日高副校長)

最後に企業の方に。本校は、こういう方向に行こうとしているんですけど、どうでしょう。

(三隅委員)

ありがとうございます。地域教育は、地域の問題だけじゃないと思うんですね。今、SNSとかで、若い人はインターネットで世界で起こったことが瞬時に伝わってくる時代になっているじゃないですか。だから、宇部単独でやるというのは、やっぱり、実際にPDCAを回せるというところかな、そこに重点を置かれたらと一つは思うんですね。でも、我々企業として、何がお手伝いできるかなと考えると、みずから課題を探る能力、それから多くの小さなイノベーションのところで一緒に考えることはできるのかな。課題を見つけるとかですね。このややこしい時代に、やっぱり課題を見つけることは、かなり大変だと思うんです。だから、その辺で我々も苦しんでいるところがありますから、一緒になって、若い人が今どんなことを考えているのだろうと、こういうのが非常に参考になりますので。

私はシステム部門をちょっと担当しているものですから、IoTとか言われると、もう、50歳以上の人は本当についていけない世の中なんですよ。スカイプとか言ったって、できないでしょう、ここにいる方は多分。(笑声)若い人がばりばりにやっていますのでね。そういったようなこと。それから、やはり、宇部高専さんですから、エンジニアリングデザイン能力の醸成というところ、これはPDCAのCheck and Actのところですよ。ここのところも、かなり、我々一緒にお手伝いできて、いわゆる科学技術の部分ですから、ここは根本。ここに持って行って、課題をどうクリアしていくかというところを一緒になって、ここも解決できるというふうに、ひも解いていくと、我々にもウインになるみたいなところができますので、ぜひ、その辺を摺り合わせていただくと、非常にいい方向に向かっていくのではないかなと思います。ただ、宇部市とか、山口県だけというところにとらわれない方がいいのかなという気もします。PDCAを回すところは狭い地域でのほうが動きやすくてもいいかもしれません。

ども、ネットがあるので、少々のことはできる時代ということじゃないかなと、ちょっと感じました。

(師井委員)

今さっき市長からありましたように、中学校も小学校もコミュニティ・スクールというのがあるので、子供と先生がフィールドに出ていくことを本当に重要視しています。4年間の間に、本校も大分変わりました。出て行くことで課題も見つかるし、少子高齢化社会の中で果たす子供の役割から地域が果たす役割って、本当にわかってきたような気がします。延べ大体400回ぐらい出ているんですよ、外に。部活が20あれば、月1回清掃活動をやっただけでも年間12カ月あれば240回ですよ。それにあと地域行事で外に出ます。そこの運営ももう任されますので、古くから伝わってきた地域のいわゆる祭りとか、紙芝居とかもオリジナルでつくって。今度、県から明治維新150年記念での講演依頼もありますし。また、ちょうど今延岡市の小学校と中学校の校長会長さんがコミュニティ・スクールの視察で本校に来ておられプレゼンとかもできています。このちょっと前も横浜から来られました。山口県が地域教育力日本一というのを打ち出して、地域に出ていこうと、地域からも来てもらおうということで、初めて課題もわかるし、ウイン・ウインの活動ができるということが、実際にやってみて、本当に子供が伸びるんですよ。褒めてもらえる。一緒にできる。これからの地域を担う。いろんな思いができて、成長して、いろんな面で伸びていくというのを感じます。

お年寄りの方が大体地域の大きないろんな役職に就いておられますが、やっぱり、人手が足りないとか、苦しんでおられるのを子供たちが助けられる。お互いウイン・ウインの関係でというのを本当に感じるがよくあります。2年前にお陰さまで文部科学大臣賞をいただいたんですよ。その時、文部科学省で日本各地の方々とお話した時に地域協働活動ということが地域貢献を充実させているのを感じました。これから目指す、いわゆる学校の姿は、中学校と高校は違うにしても、やっぱり、フィールドに出て行って、そして活動することが先生も生徒もいろんな意味で大きな意味を持つんじゃないかなということを本当に考えております。目指す方向は間違っていないと思いますので、中高連携も含めて一緒に頑張らせていただければなと思っています。

(議長)

目指す方向は間違っていないと。自分たちだけでやらないように、地域と一緒にやっていただきたいという結論かなと思います。津田先生、最後にまとめて、総括を。

(津田委員)

そんな、とても私がそんな。今校長先生おっしゃいましたように、本当にやはり学校で学んだ知識がどうやって社会に生かせるか。また逆に社会に出たら、またもう一度学び直さなきゃいけないということがあるわけで。やっぱり、学校の中で、知識を得るだけじゃなくて、それがどうやって社会に生かせるのか。そこを本当にわかってやらなければ、本当に形だけの知識になるだろうなと思いますし、また社会に出てからも、もう一遍学び直さないと本当のことはわからないという意味で、両方の連携というのは本当に大切だなというふうに思いました。

ちょっと話がそれたら失礼しますけれども、私自分の仕事をやっている上で、いろいろと医学の勉強もどうしてもしなければならぬ場面が出てきます。そうすると、本当に素人ですけども、イロハから覚えたり勉強したりして、本を読んだり、その他で勉強します。そうやって、いろいろ調べたり、勉強したり、あるいは、いろんなお医者さんからお話を伺ったりして感じたことなんですけども、医療と私たちのやっている仕事って、非常によく似ているなというふうに思いました。申しますのは、お医者さんの場合は、まず検査をします。そして、問診をします。そして、この人の病気は一体何なんだろうと、これはどういうところに病気があるんだとか、病気を特定していくと。何度も何度も繰り返しながら、試行錯誤して、病気の原因を突きとめていくと。じゃあ、この病気をどうやったら治せるんだと。どういいう方法がいいんだ。こういう方法があると。こういう副作用もあるよねと。この人の、例えば既往症はこうなのか、この人の場合はこういう治療をすると危ないね。でも、治さなきゃいけないと。どうしたらいいのかということを実行錯誤しながら、その治療の方法を決めていくと。私たちも非常によく似ている。ただ、違うのは、お医者さんの場合はこれからのことをどう考えていくかということ。我々の仕事は過去にどういうことがあったかということについて法律要件を当てはめて法律要件の中で法律効

果はどうなるんだと。そうすると、その事実は一切何なんだ。当然当てはめる法律が変わってくるなど。これがわかったとしても、それをどういう形で実現してくのかと。いろんな手法の、どれをとればいいとかいう意味、非常によく似てるなというふうに思いました。法律でも医学でも工学でもあらゆる分野でもそうだろうと思います。そういう意味で、取り組んでおられることはこれからの学生さんにとって、本当にいいことだろうと思いますので、ぜひ、よろしくお願い申し上げます。

(議長)

おまとめいただきまして、ありがとうございます。

まとめられるかどうか、非常に心配だったんですが、済みません。もう時間も5分ほど過ぎておりますので、これで議事を閉めたいと思います。ありがとうございます。(拍手)

(総務課長)

本日は委員の皆様にご貴重な御意見をいただきました。

閉会に当たりまして、三谷校長から謝辞がございます。

(7) 校長謝辞

本日は、皆様方お忙しい中をおいでいただきまして、貴重な意見を承りました。本校も4月から何度も申しますが、新しいカリキュラムで、新しい宇部高専を作っていこうと思っております。議論の中でもありましたように、これからの時代はやはり地域の皆様方と協力し合いながら人を育てるという時代に入ったと思います。学生諸君には、やはり、みずから考える力を養いつつ、地域の方々ともコミュニケーションをとりながら、いいものをつくっていくと、そういうエンジニアになってもらいたいと思っております。本日は本当にありがとうございました。

もう一つですね、非常にお願いしにくいことではありますけれども、皆様方委員の任期が今年度末でございますけれども、できますれば、30年度からも引き続き委員をお務めいただければと思っております。貴重な御意見を賜りたいと思っております。

本日はどうもありがとうございました。

(8) 閉 会

総務課長の進行により、運営諮問会議が終了した。